

追悼 阿津川令子先生を偲ぶ

阿津川^{あつかわ}令子^{れいこ}先生が令和5年11月22日にご逝去された。心理学研究科心理臨床学専攻は大きな悲しみに包まれた。先生は現心理臨床学専攻の前身の臨床心理専門職大学院の始まりから、私たち専攻の教員および心理臨床センターの相談員・職員と共に仕事をしてきた大事な同僚であり、仲間であった。先生は、心理臨床の実習系の中心的な指導者の一人として、常に誠実で確実な仕事をなさり、専攻を運営していく上で私たちにとって欠かせない大変重要な存在であった。

先生は京都教育大学をご卒業後、静岡大学修士課程を修了され、大阪市立大学博士課程に進学された。以後、滋賀医科大学精神医学講座の文部技官、追手門学院大学人間学部の助教授等を経て、2008年4月より関西大学に赴任された。ゲシュタルト療法のほか嗜癖やトラウマの治療をご専門とし、豊富な心理臨床の経験に裏打ちされた授業は、学生から揺るぎない信頼を得ていた。通夜、葬儀には大学教職員だけでなく、多くの修了生が出席し、その死を悼んだ。先生との思い出を共有するために、ここに関西大学人間健康学部、同大学院心理学研究科心理臨床学専攻の教員及び心理臨床センターの相談員による追悼の文章を掲載する。

関西大学心理臨床センター
センター長 中田 行重



2015.10 彦根にて研修会



2020.10 還暦のお祝い



2023.4 朽木村にて

追 悼

池 見 陽

阿津川令子さん、今あなたの追悼原稿を書いている事実は不思議な非現実のようでもあり、また否認することが許されない現実だと自分を納得させています。今生でもう会うことがないのですね。

阿津川さんと知り合ったのは実は何十年も前のこと。二十数年前、当時阿津川さんが勤めていた滋賀県精神保健センターに何度か僕を講演に呼んでくれました。その頃から、ゲシュタルト・セラピーとフォーカシングのことなど、熱く、いや、僕は熱く、阿津川さんはクールに語り合いました。帰りにいつも瀬田の駅だったか、どこかの駅まで車でおくってくれました。靴を脱ぎ、裸足でマニュアル車を運転している姿を「カッコイイ」と僕は密かに思っていました。

関西大学・臨床心理専門職大学院で一緒に仕事ができ、とても充実していました。ルーズな私よりも、遥かに緻密で準備周到に授業計画や採点などの面倒を見てくれました。そう、「とても面倒見のいい人だ」と感心していました。授業前後にいろいろな話をしましたが、今も印象に残っているのは、次のような内容のやり取りでした。

「今の X 期生の男子たちは入学した時には、全員彼女がいなかったのに、今は、みんな誰かと付き合っている」

「そうなんですね、よくご存知ですね」

「うん、ちゃんと、スパイを放ってある」

院生たちが阿津川さんと雑談するのが好きだった理由がよくわかりました。

阿津川さんのご実家は浄土宗のお寺です。僕の家も浄土宗なので、仏教の話とかネパールのお釈迦さま生誕の地の話とかに付き合ってもらいました。「兄が同じようなことを言った」とポツンと言われました。通夜の時にはそのお兄様が導師様を勤められました。馴染みがあるお経、念仏がお堂（会場）に響き渡るなかで今生のお別れをすることができました。

僕は自分がいつ生を授かったのか覚えていません。誕生日は親に教えてもらって知っていますが、その日に私の生が始まった記憶はありません。そもそも生には始まりがあるのでしょうか。そして生には終わりがあるのでしょうか。第三者の目では、生の始まりは誕生した日、終わりは亡くなった日ですが、当事者の視点ではどうでしょうか。始まりはいつだったかわかりません。そして死をもって意識が消滅すると私は思っています。それは臨死体験をした人たちが共通に伝えていることです。自分の死体を上から眺めていた、医師たちがしていることが見えていた…その後、光に導かれて…。阿津川さんがメールに書いていたように、「南国の島に行く」ような感覚で極楽浄土に行かれたのでしょうか。身体性を帯びた今生での苦しい闘病生活、本当にお疲れさまでした。

きっと別の世界でまたお会いすることになるでしょう。今生では縁あって、共に働きました。極楽浄土でお会いするまで、しばらくのお別れです。

こころに棲む、阿津川玲子先生のこと

石田陽彦

2023年11月22日夕刻、阿津川玲子先生の訃報を聞いて愕然とした。

2021年5月14日の午前中に行なわれていた実践実習3の授業中に体の不調を訴えられ、帰宅後受診、緊急入院となった。それ以降、何度かメールのやり取りでお互いの近況報告をしていたが、一度もお会いすることなく旅立たれてしまった。ご逝去されてひと月が過ぎるが、まだ実感が無い。

個研のドアを開けて「先生、ちゃんとあの仕事やっておいてくださいね」「もう、腹立つわ、あの件……」と入ってこられそうな気配がある。いや、まだ気配がする。四十九日が過ぎればその気配も変わるのだろうか？ いや、多分、私がこの大学にいる限り、阿津川先生が私の研究室のドアをノックされる気配と、記憶に残るあの笑顔は消えないだろう、と思う。

現実をしっかりと捉えられてコツコツと仕事を進められる反面、スピリチュアルなことに対する興味関心も非常に強い方だった。実務を離れば、気楽な場ではそんなスピリチュアルな話も良くされた。グリーンケアの仕事している私に、霊場を旅された後「お礼買ってきましたよ」と何度かくださった。私の健康を気遣ってくださっていた先生が先に旅立たれたのは、何という皮肉なのだろうとも思ったが、すぐに、いや、おそらく他の人の苦痛をご自身の身で引き受ける方だったからなのだろう、と思っておす。おそらく私の鏤骨もお引き受けいただいていたのだろう。

私は通夜に参列できなかった。あまりのショックで動けなかった。乖離のような行動のマヒが起きていた。なんとか葬儀には参列し、葬儀が始まる前に御兄さまにお許しをいただき、ひとり棺を開けてお顔を拝見した。声は聞こえなかったが、確かに間違いなくニコッと微笑んでいた「ようやく来ましたか」と。しかし、ご出棺前の最後の対面の時にはそのお顔は厳しいものになっていたように感じた。これから死出の旅に出られる覚悟をされたようであった。ここまで書いて思うのは、病に伏せられてからお見送りするまでのことばかりだな、と。思い出をほとんど書いていない、というか、書けない。まだ思い出にははいけないような気がしている。穏やかに最後を迎えられたことを示すメールを転載しておきます。

石田先生

実は、私のほう、10月に入って急激に病状が悪化し、積極的治療も示されましたが、リスクも大きく苦痛をとまなうものなので、私は断りました。あとはもう、穏やかに、痛くなく、苦しまず、最期を迎えたいです。

なので、早ければ明日にでも緩和ケア病棟に移る予定です。緩和ケア病棟の医長は昔の同僚なので、安心して過ごせそうです。

そんなわけで、復帰したかったけれど、無理になりました。今まである意味、「実務家教

員」として二人三脚、いろいろありましたが、学ばせていただいたこともたくさんあります。ありがとうございました。腹立つこともありましたが（笑）。
専門職大学院をまっとうできただけでも幸せなことです。

阿津川令子

阿津川令子先生へ

岡田弘司

先生がご逝去されてから1か月あまりが過ぎました。いまだにさびしさが募ってまいります。

専門職大学院が立ち上がった頃、二人して、夜遅くまで残り執務にあたっていたことを思い出します。どちらかが先に帰るときには、互いに気遣って「そのぐらいにしておきましょう。また明日にしましょう」と声を掛け合いました。水曜日に毎週行った実習会議では実習系の教員が集まって、熱く意見を取り交わしました。先生の教育へのご情熱とお優しさに多く触れることができました。会議を早めに切り上げて、皆で卓球したこともいい思い出です。

今、心理臨床センターの紀要に載せる論文を構成しています。テーマは地域に開かれた大学附属の心理臨床相談施設の在り方についてです。先生が手塩にかけられた本センターの歩みを思い出しながら、また先生がお作りになられた実習用のマニュアルや、一緒に手がけさせていただいた規定などを読み返しているところです。先生ならばどのようにお考えになれるのかとの思いもはせて原稿を進めています。

長い間、お疲れさまでした。感謝の気持ちで一杯です。

先生とご一緒できたことは私にとってかけがえのないものです。これからも先生のご遺志を継いで長く学生たちの教育にあたって行きたいと思います。先生が大切になされた学生や修了生たちとともに、心理臨床の発展を志していきたいと思います。どうかお見守りください。

本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

阿津川令子先生を偲んで

香川香

阿津川先生、これまで本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

私の研究室は阿津川先生のお隣にあります。阿津川先生はいつも遅くまで業務に取り組んでい

らっしゃいました。お隣にいますと、お互いに何となく気配を感じることができます。私は仕事をしながら、悩んだり、決められなかったり、考えがまとまらなかったりしたときには、お隣のドアをノックして阿津川先生にご相談することが数多くありました。いつも温かく相談にのってくださり、的確なご助言をいただいたり、私の考えに対して「それでいいと思うよ」と認めてくださったり、逆に阿津川先生からご相談いただいたり、細やかにコミュニケーションをとりながら大学院生の教育に取り組んできました。気軽に相談できる環境がいかに心強いことであったか、今、阿津川先生の研究室のお隣で、私は寂しさとともに実感しています。毎週のように実習会議も行っていました。阿津川先生は年間スケジュールに沿って、必要なタイミングで議題を提示してくださるとともに、いつも美味しいお菓子をご用意くださいました。責任をもって業務を行うことと、リラックスして楽しく話し合うことの両方を大切にされていたと感じます。仕事の合間には、ランチに行ったり、すっぽんで飲んだり（私はお酒ですが阿津川先生はお茶を飲んでおられました）、卓球をしたりしたこともありました。日常のなかの楽しい思い出ですが、もっと一緒にしたかったです。

本学の実習の土台は、阿津川先生の丁寧で配慮の行き届いたお仕事によってつくられています。実習生も実習施設も利用者様も教員も、関わる皆がうまくかみ合うように多大なエネルギーを注いでくださいました。後進を育てる使命感、責任感とともに、穏やかさと優しさを兼ね備えていらっしゃいました。私の力量では阿津川先生と同じようにはできないのですが、阿津川先生から引き継いだものを大切に繋いでいけるよう努力したいと思っています。阿津川先生が休職されたときに1冊のノートを引き継ぎました。阿津川先生が丁寧に実習業務に取り組んでいらっしゃったことはこのノートからもはっきりと伝わってきます。このノートは私のお守りとしてこれからも大切にします。

阿津川先生は、時折、南の島で休息のときを過ごしていらっしゃいました。阿津川先生にとってとても大切なひとときであったことと想像します。阿津川先生、今はどうですか？南の島にいるように心地よくお過ごしになっていらっしゃることを願っています。

阿津川先生から頂戴した最後のメッセージを読みましたときには、心が揺れ動き、涙が止まりませんでした。文面からは、阿津川先生の心遣いと優しさ、そして強さを感じることができます。今までお世話になり、本当にありがとうございました。感謝の気持ちが阿津川先生に届きますように。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最後のメール

北村由美

2023年10月17日、阿津川令子先生から私たち臨床心理の教員全員にメールが届けられました。

ご病状が急変し、いつ意識が混濁するかわからないので、早めにご連絡をくださったということでした。お心のこもったそのメールの最後に、返信は無用と書かれておりました。メールをもらってもご返信ができないと。その時私は、先生の真のご病状を理解しました。そして、いまさらですが、これまでのご恩にお礼を申し上げようと思いました。阿津川先生に宛てた最後のメールです。

ご丁寧なごあいさつを賜りありがとうございます。先生のご病状については、年に数度差し上げるお手紙のやり取りで伺っておりました。先のお便りでもご自身の選択された治療法で、病気とつきあっておられるご様子でしたので、このようなメールを頂戴するとは思っていませんでした。先生とは専門職開設の1年前にお目にかかり、ともに歩んでこられたことを本当にありがたく存じます。

博士課程が福祉であった私は、前職の短大教員の傍らカウンセリングルームの相談員として学生相談を担当し、学部時代から関わっていた子どもの心理療法や心理アセスメントを主に臨床を行って参りましたので、大学院のケースに対応することはなかなかむずかしく、先生のように幅広く臨床をなさった先生とは格段に知識やカウンセリング力が低く、とりまとめをされる先生はいつもハラハラなさっておられたと思います。追い抜くことはできなくても、せめて背中を見て追いかけることができたらと思った日々でした。少しの間ですが、カンファレンスの授業で一緒させていただいたことが、私の宝物となっております。本当にありがたいことでございます。お目にかかることはできなくても、心の中の先生がきっと話しかけ、励ましてくださると思います。たくさんのご恩をありがとうございます。感謝しかございません。

お返事は無用と承りましたが、感謝も述べないままでは自身が許せません。先生のご意向にそえませんがお許しくださいませ。直接お礼を申し上げられないことが寂しいです。

(2023年10月23日)

お別れは突然にやってきました。でも、先生との思い出やたくさんの思いは、先生がいらっしゃらなくなってもずっと残ります。先生と一緒させていただいたさまざまな光景が、思い出ではなくて今この瞬間の出来事のように心の中に広がっていきます。

阿津川令子先生を偲のんで

寺嶋繁典

阿津川令子先生の御霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。阿津川先生の訃報に際し、私

私たちは深い悲しみに包まれています。3年におよんだ新型コロナウイルス感染症が収束し、ようやくキャンパスに日常が戻りつつあるこの時期に、先生とお別れしなければならないのは残念でなりません。今年は12月に入っても夏日を記録する地域があり、暖かい師走を迎えています。この季節にキャンパスでお目にかかる、決まって出てくる話題は湖西に連なる比良山系の雪化粧のことでした。とりわけ暖かい今年でしたら「このままでは湖面に映える美しい比良山の雪景色が見られなくなりそうですね」と残念そうにおっしゃっていたでしょうか。今にも先生のお声が聞こえてきそうな気がします。

先生とのご縁は、平成21年に開設された臨床心理専門職大学院にお迎えしたのが始まりでした。先生は、長年にわたり培ってこられた心理臨床の豊富な知識とご経験を学生の教育に惜しみなく注いでくださり、専門職大学院の実務教育の要となる実習体制の礎を築いてくださいました。先生の思いやりと心配りが隔々にまで行き届いた、この実習体制は心理職としての人格形成にも配慮されたもので、実務教育のあり方について新たな方向性をお示しくくださったと思います。この十数年の間に先生のご指導を受けて巣立った修了生は300名を超え、今では幅広い分野で活躍してくれています。先生から直接のご指導を仰ぐことはなくなりましたが、先生のご遺志は本学の心理職養成において、この先も絶えることなくしっかりと引き継がれていくと思います。これまで本当にありがとうございました。いつまでも私たちを見守ってください。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

弔辞（令和5年11月24日葬儀にて）

中 田 行 重

阿津川令子さんのご霊前に対し、心理臨床専攻の教員の一人として、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

阿津川さん。長く苦しい闘病生活が終わったんですね。これからは安らかに過ごしてくださいね。でもね、阿津川さんの弔辞を読むことになるとは思わなかったですよ。病状が一進一退とは聞いていたけど、大学に戻ってこられるだろうと思っていました。飛鳥のSD合宿も来年度は久しぶりに、阿津川さんが戻ってこられるだろうと思っていました。現実的にはスポット参戦だろうな、それでも楽しみだな、と思っていました。一人の大人の女性としての生き方を、若い院生に見てもらいたいなども思っていました。1カ月ほど前、「積極的治療はもうやらず、緩和ケア病棟で穏やかに最期を迎えたい」と書いたメールをいただいた時は、辛さとも悲しさなどの言葉ではとても言い表せない気持ちで、言葉が出てきませんでした。そこには「死に対して恐れも不安もなく、南国の楽園にひょいと旅立つようなもので、死によって高い精神性が得られるならしめたものです」と書いてありました。キューブラ・ロスが言いそうな凄い言葉ですが、阿津川さん

は自分をひけらかすような人ではないので、本当にそういう境地に至ったんだろうと思いました。大きな喪失感があったんですけど、やっぱり阿津川さんには叶わない、と思いました。

そうなんです。阿津川さんは決して自分を見せびらかさずに、重い責任感と高い集中力で仕事をやり遂げていました。阿津川さんが入院なさっている間も、臨床の専攻の運営のかなりの部分が、阿津川さんが作った基盤に乗っかっていたと思います。例えば、心理臨床センターの細々とした運営の実務も、今は香川先生が引き継いでくださっている学生へのケース振り分けから来談者リストへの登録の流れも、阿津川さんが作ってくださったしっかりとした土台に支えられています。僕はといえば、飛鳥のSD合宿についての学生への案内のチラシは今も阿津川さんが作ったフォーマットに微修正をするだけで済むのです。

そのように強い責任感で専攻の実務を仕上げる一方で、阿津川さんには実に大胆なところがあったと思うんです。SD合宿での「老賢者のワーク」のような、凄まじい深みのあるワークをやったり、ある時は、女性の院生だけを集めて男子禁制の「女の生き方」みたいなエクストラセッションをやったりしてましたね。仕事への責任と大胆さの両面に共通して感じるのは、阿津川さんの芯の強さです。僕はその点、阿津川さんには叶わないなあと感じていました。なので、1カ月前にいただいたメールに「死は怖くない」と書いてあるのを読んだ時、最後まで阿津川さん、あなたには叶わない、と涙ながらに思いました。阿津川さんを学生が慕うのも、私たち教員が信頼するのも、その点じゃないか、と思います。

阿津川玲子という女性事例についてのこの考察、当事者としてどうですか？「中田さんは読みが甘いね」と笑われそうな気もするけど。こういう話をしたかったけど、忙し過ぎて出来なかったね。

最後に一言。阿津川さんの訃報を一昨日受けて、力が出てこなくなったんですけど、昨日、ある思いが浮かんで、ようやく今を受け入れられそうな感じがしたんです。それはね、あの世には、僕の知り合いが沢山いるんです。で、阿津川さんには、その人らの話を聴いてあげて欲しい、カウンセリングしてくれないかな、と思ったんです。「あなたが中田さんの知り合い？」と言って会話が始まる場面が想像された時に、阿津川さんの訃報を受け入れられそうな感じが起こったんですよ。僕の中では「老賢者」ではないけど、「阿津川玲子との対話」というワークが始まっている気がするんです。「また大げさな」って阿津川さんは笑いそうだけど、そういうイメージがあると、阿津川さんが僕の中で続いていきそうな気がします。

そして、いつかは僕も阿津川さんの所に行きますからね。そう遠くない時期に。「中田さん、もう来たん？」とか言って今度は書類仕事のないあの世で話をしたり、阿津川さんに基本をたたき込まれた卓球をしたりしたいですね。

闘病生活辛かったですでしょう。安らかに眠って、そして待っていてください。

これまで有難う。

阿津川先生との出会い

斧 原 藍

阿津川先生の訃報を聞いてから1か月経ちました。こうして文章を書くことになり、先生との思い出を振り返ってみました。何を書けばいいのかとまじりません。心理臨床センター（CR）は先生が尽力されてきた場所の一つなので、CRで働いていると阿津川先生を思い出す場面が多くあります。「阿津川先生だとか言うだろうな」「阿津川先生はこれは嫌がるかな」などが自然に頭をよぎり、なんだか今でもどこかで生きているような気がしてきます。だけど一方、告別式で拝顔して、手を合わせて最後の挨拶をして、お見送りをして、先生がいないことを実感しているのもまた事実で、もういないと分かっているのにまだいるような感覚になります。

先生との出会いは10年前、私が大学院に入学したときです。在学中も修了後もお世話になり続けていたので、書ききれないほど思い出がたくさんあります。最初は、クールで厳しい先生と思っていたので、先生と話すだけで緊張していましたが、すぐに母のような包容力や少女のような可愛さがあることを知りました。あの落ち着いた表情で、女子学生と一緒に「きゃっきゃっ」と喜んだり楽しんだりしている先生。そのギャップがまた魅力的でした。修了後も、先生が精通しているゲシュタルト療法やアクションメソッドを体験する合宿に何度も参加させていただきました。私の個人的な問題もグループワークで扱ってもらい、先生の繊細な寄り添いと力強い励まし、グループの温かさなど、もう何年も経ちますが当時の心の動きや感覚は今でもはっきりと覚えています。

10年間、先生からは与えていただいていたばかりで、私は何か少しでもお返しできていたでしょうか。もう先生に直接恩返しをすることはできないけど、先生にもらったものを忘れずに、先生に恥じないように、まずは私自身がちゃんと自分の人生を生きていこうと思います。先生との出会いに感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

月夜の山道を登り、老賢者に会いに行く

角 隆 司

阿津川令子先生に出会った2010年、僕は大学院浪人で後期試験に臨むという、なんとも崖っぷちの局面でした。面接官であった先生は眼光鋭く、受験生の私は「これはダメかもしれない」と打ちひしがれて「違う道を目指そうか」などと落ち込みながらトボトボ家路につきました。思えばここから縁をいただいて、心理臨床の世界へと足を踏み入れることとなり、十数年を経てやっと自分を「カウンセラー」と自称できるくらいのところまでやってきたように思います。

ゲシュタルト、サイコドラマ、アサーションなど「アクションメソッド」はもちろん、臨床家として、あるいは人として大切なことを、先生から教えていただきました。グループのアシスタントや研究会で見るワークは、鋭さの中に人間存在への慈愛のある先生の生き方そのものが映し出されるものでした。そんなセラピストになりたいと、今も背中を追っていますが、まだ道のりは遠く感じています。

最期の病室で「なんか食べもんの思い出ばかりやなあ」と仰いましたが、たしかに先生とは決まって何か食べている思い出ばかりでした。千里山のグリシーヌ、京都の川床、彦根荘のバーベキュー、仙台のイチジクのタルト、坂本の鶴喜そば、八天堂のクリームパン。挙げていけばキリがありませんが、何かあると「食事にいきましょう」と誘ってくださっていました。それが自分にとって「賢者に会いに行く」体験だったと今になって思います。これからは心の中で、山道を登れば少し若い「賢者」に会えるかもしれないし、そうでなければ何か迷う時には月を見つけて尋ねてみることにします。

恩師であり、師匠であり、気の合う友達のような先生に、しばらくお会いできないのは寂しいですが、なるべく遠い未来に僕もそちらへ伺ったときには、また美味しいものを食べながら、僕の人生にどんなオチがついたか聞いてください。

大きな学びと支えをくださった阿津川先生に最大限の感謝とともに、ご冥福をお祈りいたします。

大事なおまじない

西澤晴香

阿津川先生には「魔女力」がある。先生と一緒にいて、私はそう思っていた。

SD合宿や自主合宿でのワークの中で、同期や後輩がみるみるうちに自分のことを語り始め、大いに泣き、そして穏やかな表情になっていく姿がまるで魔法のようであったこともその理由のひとつではある。ある時は突き刺さるような真剣なまなざしで大学院生を指導していたかと思うと、またある時には心地のいいそよ風のような優しい安心感をまとっていたり、また別の時には無邪気な少女のように声を弾ませ好きなもののお話をする、そんな変幻自在な先生の在り方が私にそう思わせたのではないかと思う。

阿津川先生が闘病を始められ、なかなかお会いすることができなくなってからも、私の周りには先生の気配があり、それもまた、おまじないのように感じられていた。だからこそ、しばらく休養されたら、変わらぬ笑顔でひょっこりと私の前に姿を現してくれると、そう信じて止まなかった。

先生が亡くなられて、直接お話ができなくなってしまったことは本当に残念で、とてつもなく寂しいけれど、私はこれからも先生の気配を「大事なおまじない」として感じながら生きていきたい

と思う。阿津川先生はきっと、私たちの最強の守護天使だ。「嫌よ、私はタヒチのビーチでゆっくりしてたいのに」と笑いながら言われそうだが、そう言いながらもきっと私たちをお守りくださるだろう。

先生、そちらの海はきれいですか。いつの日か、そのビーチで先生と波の音を聞きながら、いろんな話がしたいです。

阿津川先生との大切なご縁

畑 山 ゆ り

阿津川先生、先生は私にとって間違いなく、私の人生の中で大きな影響を受けた「先生」でした。そして、先生という枠組みを超えて、人間としてはもちろん、女性としても、臨床家としても、多くの学びを与えてくださった唯一無二の「存在」でした。

先生との出会いは、ある講座でした。講座で理論を教えてくださいの際にも、理論を丁寧に大切に伝えようとしておられ、その姿勢には多くの感じるものがありました。実践場面でのイメージが自然と湧き、自分なりに明日から活かしていこう、活かしていきたいと思える、ワクワクする講座でした。その時の出会いがあって、先生とのご縁が繋がったのだと思うと、今思えば、その講座の受講を選んだ自分の選択は必然だったように感じます。先生との出会いは、その後の自分の人生を大きく左右するものになりました。

先生との思い出は数多くありますが、中でもグループワークのSVをしてくださったことは、私のグループワークに向かう姿勢に確実に変化が起きましたし、先生と2人でグループワークについてお話できる機会はとても貴重なものでした。先生のSVを受けた帰り道には、SVの有難い側面の一つだと思っている、“明日からも頑張るぞ”という自分の内側から力が漲ってくるような感覚をいつも実感しておりました。

そして、先生との繋がりに思いを馳せるたびに浮かんでくるのは、やはりアクションメソッド研究会での出来事です。今でも目を閉じると鮮明に思い出せる場面は数多くありますが、中でも外せない思い出のワークは、私の幼少期の思い出を扱ったものでした。先生が私にとっての大事な人の役をしてくださり、その時の感覚や感情は思い出深いものがあり、今でも私の心の奥の大切な場所に在ります。

先生の還暦祝いをさせていただいたときには、このような未来が待っているとは全く想像もできませんでしたが、これからも先生からたくさんのことを学ばせていただきたい、という思いでいっぱいでした。早すぎる旅立ちに、先生を慕う人たちはみんな、先生が恋しくて、まだまだその思いの中にいる人たちも多いのではないかと思います。私もまだ実感が湧かないところがあり、向き合うことにまだ準備が整っていない自分がいるのだろうとも薄っすらと感じています。先生

が学ばれたことをもっと教えていただきたかった。そしてまた先生も、病とともに過ごされたなかで得られたものも含めて伝えたい、活かしたいという思いがあるのだと、仰っていました。

クライアントのこと、後学者のことを常に考えておられた先生。その姿勢を私の中にも持ち続けることで、私の中に先生が生きていると感じることができるように、日々の生活を、出会ったクライアントとの臨床を丁寧に積み重ねていける自分でありたいと思います。そしてまたどこかで先生とのご縁があるとしたら、そのときの自分が、自分の生きた人生、心理士として生きた道によって、より豊かなものを内包していますように。

阿津川先生を偲ぶ

森 屋 匡 士

阿津川先生を偲ぶ時、不思議と、他愛のない話をしている所ばかりを思い浮かべてしまいます。仕事の事を始め、真面目な話をしていることが多かったはずだと思うのですが。阿津川先生は時々、冗談なのか本気なのか戸惑わせるようなことをおっしゃることがありましたね。そんな時の先生のいたずらっ子のような笑顔、ありありと思い浮かべることができます。その笑顔をふと変えて、後々嘔みしめることになるようなご指摘、ご助言を投げかけてこられることもまた度々でした。もっと色んなお話を聞いたかったような、もっといろんなことをお尋ねしたかったような、エンディングを迎える前に映画が終わってしまったような。とにかく何かまだ十分でない、終わっていない、そんな不思議な感じがします。

先生がいつか、「…早く、どこか南の島で、太鼓を叩いたりしながら暮らしたい」と、話しておられたことがありました。いつもお疲れでしたから、夢を語ってくださっただけかもしれませんが、今でも印象に残っています。彼岸がどんな世界であるのか、私には分かりません。もとより、私は霊的なものを感じたり信じたりする方ではありません。でも今は、先生が願っていたような、安らかな境地にあられることを祈っています。

阿津川先生、お疲れさまでした。本当にありがとうございました。